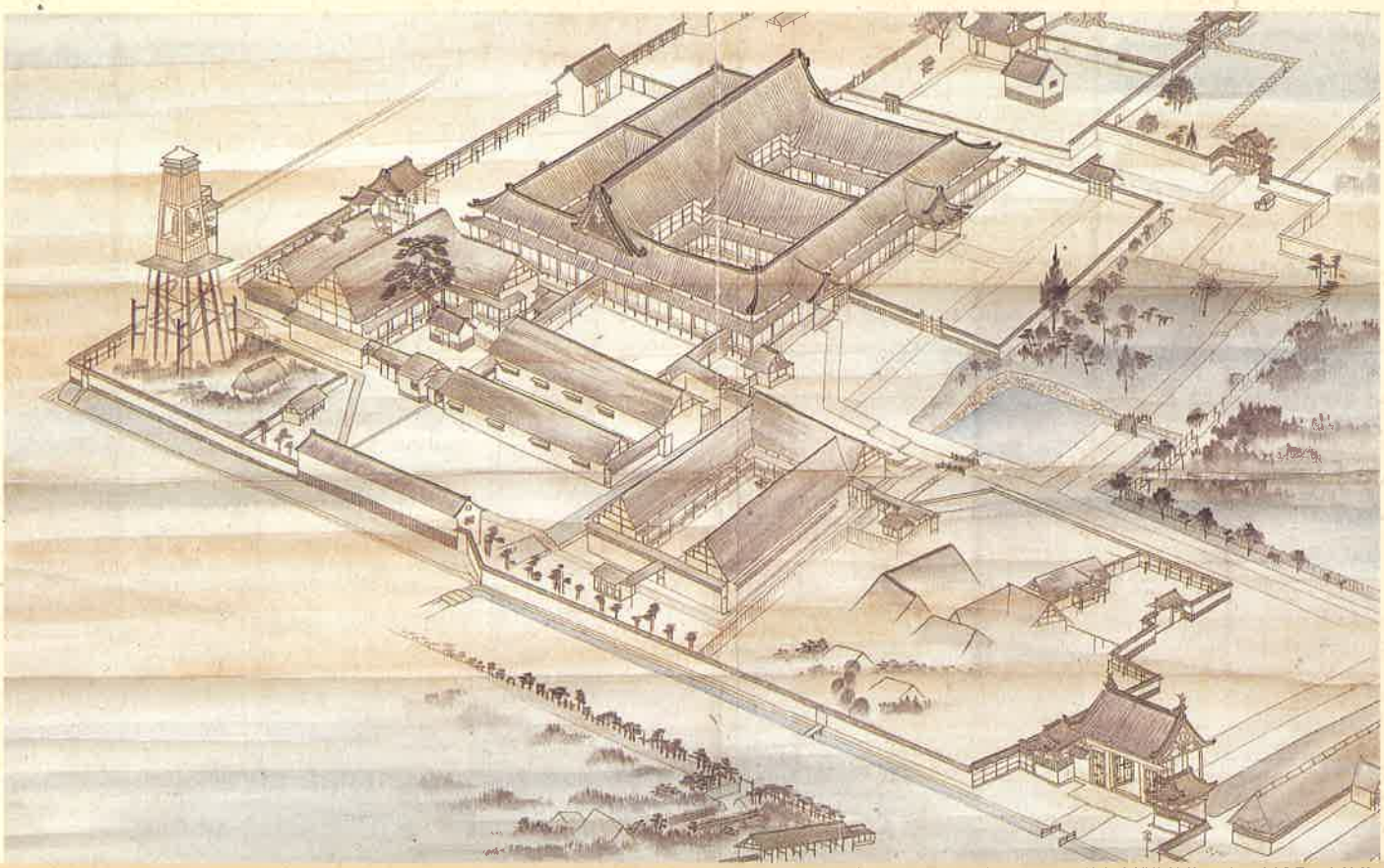
sendai-city chronicles communication paper.

せんだい 市史通信

第8号
仙台市博物館
市史編さん室



「養賢堂の図」(複製)　左端に火の見櫓が見える　仙台市博物館蔵(原本は宮城県図書館蔵)

せんだい 今 昔

仙台城下の消防事情

「火事と喧嘩は江戸の華」という言葉は江戸の代名詞ともなっていますが、仙台城下もそれに劣らず火事の多い所でした。江戸時代前期は火事に関する記録が少なく、正確な発生数は不明ですが、記録が増えてくる元禄年間以降、幕末までの約180年間に100軒以上の家を焼くような大火事は約25件(一部推定も含む)発生しています。平均すると7～8年に1回の割合で仙台城下に大火事があったことになります。数軒から数十軒が焼失する程度の火災は日常茶飯事であったといっても良いかもしれません。

火事の記録を見てみると、大きな火事の多くが2月を中心に前後約2カ月間に集中しています。当時は旧暦ですから、現在の暦でいえば2月から3月頃に当たり、仙台が最も乾燥気味で、強い風が吹く時期ということができます。強風のもと、ひとたび火災が発生すれば、延焼を食い止めるのは並大抵のことではなかったでしょう。

こうしたこともあってか、仙台藩では火災が起こった際の処置、すなわち火消について詳細な規定を定めています。城下に屋敷をもつ家臣たちはいうまでもなく、町人達も町ごとに定められた人数を町火消として出すことになっていました。江戸時代後期になると、町火消は肴町など幾つかの町に集約されるようになったようです。そうした町火消の集団をとりまとめていたのは、仙台城下の顔役とでもいうべき「親分」衆であり、その多くは藩外にも名前が知られた侠客であったといいます。

ところで、彼ら火消たちが十分な活躍をするためにも、火事の早期発見は重要な課題でした。そのために仙台城下には大きな火の見櫓が作られました。藩校養賢堂の構内に建てられた火の見櫓は、仙台城下で最も高い建築物であったためか、仙台城下を立体的に描いた資料には、必ずといっていいほど描かれています。高層建築が林立する現在では思いも及ばないほど空が広かった江戸時代において、火の見櫓は仙台城下のどこからでも姿が見える、親しみ深いものであったに違いありません。

なお、来春刊行予定の『通史編4　近世2』で、城下の消防について詳しくご紹介します。

温泉に出かけてみませんか

冬がやって来ました。
寒い日が続くと、外出するのがおっくうになって、
気分も沈みがちになります。
そんなときこそ温泉です。
のんびりと温泉に入れば、
体はポカポカ温まり、心もすっきりリフレッシュ。
今回は仙台市でも代表的なふたつの温泉、
秋保(あきう)温泉と作並(さくなみ)温泉の歴史を中心にご紹介します。

河原の湯(秋保温泉)

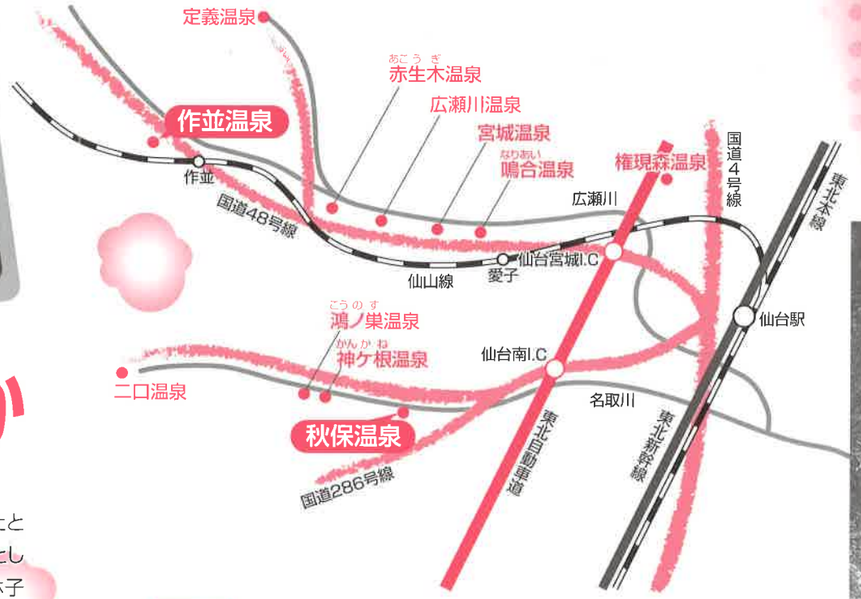
秋保温泉

欽明天皇の病が秋保温泉の湯で平癒したという伝説があり、江戸時代には名取の御湯として広く知られていました。佐々木中沢や林子平も入湯していたことが知られます。

大正3年(1914)に秋保石材軌道㈱が馬車軌道を開通させ、大正14年には軌道を電化し、湯治客が急増しました。さらに温泉クラブを経営するなど観光客の誘致に努力しました。その結果、戦前まで秋保温泉の旅館は4軒だけでしたが、現在秋保温泉旅館組合は神ケ根温泉など4軒を含む17軒の旅館で構成されています。

東北自動車道の開通は秋保温泉の知名度を一気に高めました。開通時まだ仙台西道路が未完成で仙台市中心部への道路が混雑するため、仙台宮城インターチェンジから降りる車を制限したので、作並温泉に行くバスや乗用車は仙台南インターチェンジで降りて秋保を通ることになりました。その結果、秋保温泉の存在が注目され、仙台に一番近い温泉として発展するようになったといいます。

昭和50年代後半から、秋保の各旅館ではコンサルタントの指導を受けて箱根や湯河原をモデルに設備を一新し、湯治場から温泉旅館に見事な変身を遂げています。

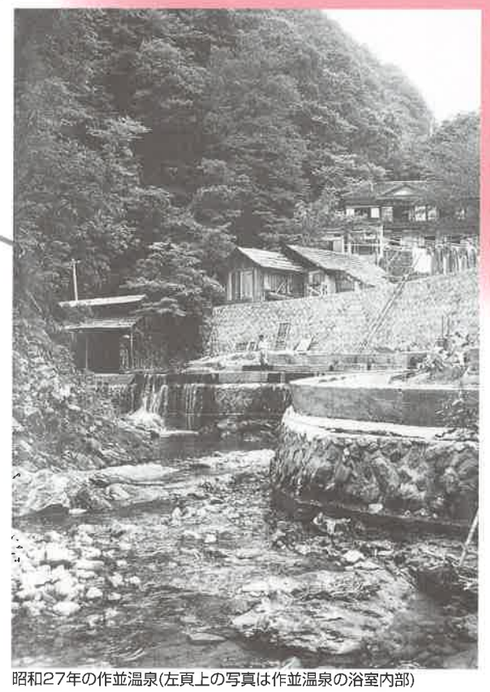


作並温泉

奈良時代の養老5年(721)に僧行基が湯浴みの法を教えたと伝えています。江戸時代の寛政8年(1796)、浴槽に下りる97段の階段などを設けて温泉が開かれました。明治15年(1882)の『宮城県温泉小誌』に「作並温泉は陸前国宮城郡作並村にあり、作並村は仙台をさる七里、関山通羽州街道に当り道路往来に便利なり」とあるように、道路交通の便がよく、昭和6年(1931)には鉄道仙山東線が開通し、仙台近郊の温泉地として発展してきました。

東北自動車道、東北新幹線の開通を控えた昭和48年(1973)に、作並温泉では「当温泉地と類似的性格を持つ秋保温泉にも追い抜かれた感がある」(『作並地区温泉地診断報告書』)との危機感から、宮城県商工労働部経営課による温泉地診断を実施しました。

その結果、山紫水明の環境を生かし、「歓楽街的温泉」ではなく「古びた昔ながらの温泉地」を目ざすべきであるとの提言により、家族旅行・グループ旅行、特に女性客に対応する施設やきめ細かなサービスを充実して客層を拡げ、美しい渓流に隣接する露天の岩風呂に代表される自然豊かな温泉として全国に知られるようになりました。



昭和27年の作並温泉(左頁上の写真は作並温泉の浴室内部)

仙台近郊の温泉

名取川に沿って秋保温泉、神ケ根温泉、鴻ノ巣温泉、二口温泉などがあり、秋保温泉郷を形成しています。付近には秋保大滝や秋保工芸の里などがあります。また、広瀬川沿いには作並温泉、定義温泉、権現森温泉、赤生木温泉、鳴合温泉、宮城温泉、広瀬川温泉などがあり、作並温泉郷を形成しています。定義温泉近くの定義如来には昔から参拝客が絶えません。

施設探訪　仙台文学館

仙台市史で使いたい写真や資料が博物館にないとき、必要なものはよそからお借りします。また、資料が見つかれば調査に出かけたりもします。このコーナーでは、市史編さん事業の過程で訪れた施設をご紹介します。

緑豊かな台原森林公園の中央西側斜面にモダンな姿を見せる仙台文学館(館長井上ひさし)は、平成11年に開館し、郷土ゆかりの文学者を中心にその作品や関連資料を収集、保存して展示や調査研究を行っています。常設展示では、4つのテーマに分けて宮城・仙台ゆかりの近代文学者である落合直文、島崎藤村、土井晩翠、真山青果、魯迅、高浜虚子、相馬黒光らを紹介しています。また企画展示室では、現在第一線で活躍する詩人72人の自筆作品とイラストレーターによるイラストを紹介する特別展「現代少年少女詩・童謡詩展」が12月23日まで開かれています。

仙台文学館　仙台市青葉区北根2−7−1
TEL　022-271-3020
交通案内／市営バス
仙台駅前　西口バスプール 13番
宮城交通
仙台ホテル前　20、21、22番
ともに、北根二丁目・仙台文学館前下車
ただし、急行と北仙台行きは除く
休 館 日／月曜日(祝日・振替休日は開館)・月末日
開館時間／9時〜17時(入館は16時30分まで)

仙台市史　でまえ講座

毎年、仙台市内の市民センターとの共催で行われている「仙台市史でまえ講座」の第4回目は広瀬市民センターを会場として平成14年6月22日(土)に開催されました。この地域に関連の深い講演内容に、当日の参加者は90名を超えました。

第5回目は高砂市民センターを会場として平成14年9月7日(土)に開催され、こちらにも市内外から100名近くの方々に参加していただきました。

今後もアンケートなどの意見を参考にして、年2回程度開催していく予定です。詳細は『仙台市政だより』や『仙台市博物館だより』などでご覧ください。

第4回「仙台市史でまえ講座」会場のようす

モノがたり仙台

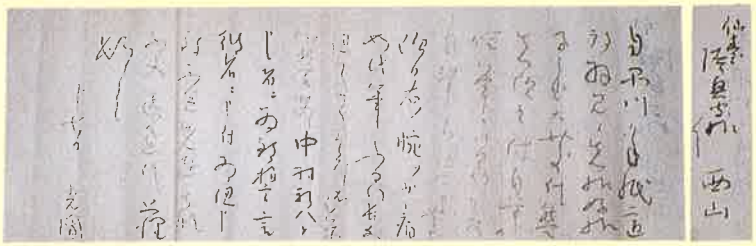
〔水戸黄門の手紙〕

少々たよりなげな筆跡のこの手紙は、徳川光圀、つまり水戸黄門が仙台藩4代藩主伊達綱村にあてたものである。元禄7年（1694）、光圀は67歳、綱村は36歳。内容は綱村の父で3代藩主だった伊達綱宗の行動についてである。綱宗は34年前の21歳の時に、不行跡を理由に隠居させられ品川の屋敷に暮らしていた。

この年5月14日、光圀は、綱宗がもはや55歳にもかかわらず、いぜんとして問題行動が多いことに対し戒めの手紙を出している。「綱宗の行動が改まらなければ、綱宗が隠居の身といっても処罰は逃れがたく、仙台藩は安危浮沈の時である」とまで言い切った手紙であった。しかし、それを見た綱宗は、いつもの光圀の筆跡でないことから偽物と疑った。

この17日の手紙は、その疑いを晴らすために書かれたものである。

実は、14日の手紙を出す際に、光圀は右腕を痛めていたらしい。そのため、「そもそも、自筆で書くべきところ右腕を痛めて長文が書けないので、祐筆に書かせたものである」と釈明している。このぎこちない筆跡の手紙は、まだ回復しない右腕で、あえて自筆の手紙をしたためた光圀の気概が感じられる一文である。



徳川光圀書状　元禄7年5月17日　仙台市博物館蔵伊達家文書

光圀はこのように綱宗を諫める立場にいた。水戸徳川家と仙台伊達家の親密さは、2代藩主伊達忠宗が振姫と結婚してから一段と深まる。忠宗ははじめ徳川家康の娘市姫と婚約するが、市姫は3歳で死去したため、その代わりとなったのが家康の孫、池田輝政の娘振姫である。振姫は将軍秀忠の養女となり伊達家に嫁いだが、養母は市姫の母お勝(梶)の方であった。お勝は水戸徳川初代頼房の養母でもあり、このことから頼房の息子光圀と忠宗の息子綱宗は従兄弟の関係となって、年長の光圀は伊達家の相談役をしていたのである。

綱宗の隠居事件は伊達騒動の発端として有名であり、その経緯は来春刊行予定の『通史編4　近世2』に詳しく紹介されるが、この手紙はそれから34年後の綱宗と光圀の様子を知ることのできる興味深い手紙である。

仙台の歴史を完全収録　各分野ごと続々登場

既刊好評発売中

【通史編3】近世1
【資料編6】近代現代2　産業経済

◆発売元：宮城県教科書供給所
〒981-0021
仙台市青葉区中央二丁目9-22
TEL:022-222-5052
FAX:022-222-5056
県内主要書店で発売します。本の発送をご希望の方は、上記あてにお申し込みください。

◆詳しくは、仙台市博物館市史編さん室までお問い合せください。
仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862
仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL:022-225-3074
FAX:022-216-1830

続刊予定
◎通史編／近世2～3・近代1～2・現代1～2
◎資料編／近代現代3～4・伊達政宗文書2～4・仙台藩の文学芸能
◎特別編／城館・慶長遣欧使節

【通史編１】原始
【通史編２】古代中世
【資料編１】古代中世
【資料編２】近世1　藩政
【資料編３】近世2　城下町
【資料編４】近世3　村落
【資料編５】近代現代1　交通建設
【資料編10】伊達政宗文書1
【特別編１】自然
【特別編２】考古資料
【特別編３】美術工芸
【特別編４】市民生活
【特別編５】板碑
【特別編６】民俗

【通史編】3,000円(税込み価格)
【資料編】4,000円(税込み価格)
【特別編】6,000円(税込み価格)
板碑のみ 5,000円(税込み価格)
1冊ずつお求めできます

『市史せんだい』Vol.12のお知らせ

昨年度の市史編さん事業を報告するとともに、研究成果をいちはやく紹介する市史編さん室の機関誌『市史せんだい』の最新号が発売となりました。

今回の特集は「仙台の燃料事情」で、戦後も仙台で燃料として一般的に使われていた亜炭や薪などについて語った座談会のほか、燃料に関する論文を掲載しています。

また、仙台城本丸大広間跡の発掘調査や仙台藩の蝦夷地領有に関する論文、伊達氏と高野山との関係を記した史料なども紹介しています。

『市史せんだい』は仙台市博物館2階売店でお求めください。

……1冊900円（税込み）

あとがき

冬の過ごし方

①温泉にのんびり浸かって冷えた体を温めましょう。②おいしい鍋物があればなおよいです。③こたつで『仙台市史』を読み、④火の元を確かめ、暖かくしてお休みください。

せんだい市史通信 第8号

発行年月日／平成14年11月30日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862　仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL／022-225-3074　FAX／022-216-1830
URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています